



宮下源都 #13
佐藤製作所★TOMEI★ミスト
「クルマを準備するようなお金もないまま、とにかく練習がしたいと思ってミストさんに行きました。みなさん個性あふれる方々でしたが、気にかけてくれて、そのうち庄司さんが、佐藤さんのクルマでレースに出ると言ってくれて、佐藤さんも「いいよ！」と言ってくれました。いまのぼくが返せるのは結果だけなので、頑張っています」

サポートを受けている若手の声

徳升広平 #47
フジタ薬局アポロ電工高山短大
「ほかの方にどうやって評価してもらえるかなどは考えず、ただガムシャラに走っていたら、声をかけていただけました。いまは僕だけの力ではできないことができていることに、ものすごく感謝しています。まだ足りないモノがいっぱいあると思いますが、先のことを準備しつつあるし、上へ行けると信じています」



ジェントルマンドライバーたちの“若手育成論” 「オレたちは若手のここを見ている」

石川（京侍）かな。牧野は本当に意気でしたから（笑）。しかも、最初はアイツほど遅いヤツはいないというくらい。走れば飛び出すし、スピンするしで、でも、あるレースで突然何かをつかんだようで、急に速くなったんです。それまでは、（振り回すような）レーシングカートの乗り方を4輪でもして、それが速いと思込んでいたのが、何かをきっかけにサスペンションやタイヤと会話しながら乗れるようになった。彼はいまでも生意気ですが（笑）、実際は繊細で、かなりの勉強家です。生意気なだけで、勉強しないドライバーはダメ。カート乗りから4輪の乗り方へ切り替えていったのは、大湯もそうでしたね。

佐藤：僕は同じレースに出ていますから感じることもあるんですが、速い選手は不思議なことに後ろから近づいてくるだけで気迫を感じるんです。そういう気迫のある選手は速くなりますね。なるほど。サポートのかたちもいろいろありますよね。

入榮：こちらが出すだけではなくて、返せと言っている部分もあります。徳升は、1万円、2万円でもそのとき自分でできる範囲で返してくれているので、信用しています。いつ返ってくるかは分かりませんが、プロになって「お世話になりました」と言ってくれば、それはそれでいいのかなと思います。

佐藤：僕はまず自分が持っている空いているクルマを貸しています。もしクルマを壊したら、「まずは庄司さんと相談してみよう」と言っています。状況

J A F F 4では、レース経験豊富なベテランのジェントルマンドライバーが若手の壁となりながら、将来性があると見込んだ若手をサポートするという取り組みも行なわれている。実際、そのチャンスを活かして、トップカテゴリーに上がっていった若手も多い。もちろん、可能性を感じさせるものを持っていることが大前提だが、これもJ A F F 4の大きな魅力のひとつだ。そこで、現在J A F F 4で若手をサポートしているジェントルマン3人に集まっていたいただき、「サポートの動機」「見ているところ」というテーマで語り合っていた。

——どういう経緯、動機で若い選手の

JAF F4 Paddock NEWS

2021 FORMULA 4 CHAMPIONSHIP

国内唯一開発競争のあるミドルフォーミュラF4の魅力を探る

Text：大串 信 (Makoto Ogushi)
Photo：益田和久 (Kazuhiisa Masuda) / 上尾雅英 (Masahide Kamio)
米重有三 (Yuzo Yoneshige)

サポートをするようになったのですか？

植田：本当なら自分が上へステップアップしなかったけど、本業や年齢の問題もあったので、自分の代わりに若いドライバーをもっと上に行かせてあげようという気になったところからですね。そういう意味では自分の分身だと思っています。入榮：僕も同じです。上に行きたいと思っていただけ、実家の仕事などがあり、そういうスタンスではレースができなくなってしまった。その後、ホビーでレースを再開しましたが、そのうち自分がやりたくてもできなかったことを若いドライバーにやらせたいなりました。

佐藤：自分の場合は分身ではないですね。自分を変更したらこれだけ速くなった、今度はあそこをこう変えてみようというのが楽しくて仕方がない。それなら、空いているクルマを若い子に貸し出して走らせれば、そのぶんいろいろいじって楽しめるんですよ。

——サポートするにあたっては、若手のどういうところを見ますか？

植田：モータースポーツに情熱があるということ。そうじゃないと、上には行けないし、努力もしない。最初は速くなくても、勢いを感じるドライバーがいいですね。

入榮：その意味では、いま僕がサポート



入榮秀謙 #46 アポロ電工フジタ薬局MT/MP
JAF F4には2006年にスポット参戦した後、17年から本格参戦を開始した35歳。19、20年JAF F4グランドチャンピオンクラス王者。(as)

次第でいくらか払う子もいれば払えない子もいますけど、それも含めてサポートです。いい成績を出したら、「ほらオレのクルマは速いだろう」と喜びを感じることもできれば、それでいいんです（笑）。いまサポートしている三宅（淳詞）の場合はちょっと特別なんです。というのも、自分の会社から声をかけたら聞こえるくらいの近所に住んでいたんです。だから、いまは自分の会社の正社員にしています。若い選手は年間の半分くらいサーキットにいきますから、普通の会社だとなかなか社員にはなれません。彼はウチの社員にして、特別にサーキットへ行かせるという方法をとっています。

植田：ウチは最初に「どこまでできますか」と聞いて、できる限り自分でお金を準備してもらい、残りの部分をサポートしています。そのぶんを返してもらおう気はまったくありません。活躍してくれればいいんです。大湯がスーパーフォーミュラで勝ったときや、牧野がスーパーGTで勝ったときは、ものすごくうれしかったし、楽しかったですね。

——若手のサポートをJ A F F 4というカテゴリーで、という部分ではないかがどうですか？

入榮：ウチのチームがこのカテゴリーで戦うことに全力をあげているのは、クルマ作りができるからです。若手だけでなく、経験豊富なジェントルマンドライバーもいますし、若手がいろいろなお金を準備するのが大きいですが、佐藤：クルマをいじれるカテゴリーはほかになくなってしまいましたからね。自分でもそれが楽しくてJ A F F 4をやっています。ここでは、若い人はクルマのことをいっぱい学べるといえますね。

植田：（ステップアップの）路線という意味ではほかのカテゴリーもありますが、J A F F 4は若い選手を育てる場として最高ですよ。クルマにはパワーがあるし、デフ（LSD）も付いていて、本当にピーキーなフォーミュラカーらしいクルマ。ちゃんとコントロールできないと乗れませんから、ドライビングの幅が広がる。ミストの社長とも、このカテゴリーは絶対なくしてはいけないとよく話しているんですよ。



佐藤 教 #12 佐藤製作所KKZS★TOMEI
多くの若手が集まっているのを庄司社長と目に見届けてきた佐藤さん。元嶋成弥（写真左）も佐藤さんのサポートで、今季はここまで3戦に出場（すべて優勝）。右は岡山での元嶋。(as)



植田正幸 #11 Rnsports制動屋KKZS
Rn-sports代表。スーパーGT GT300参戦経験もあるベテラン。今季はSFL、FRJなどにも参戦中。2018 FIA-F4インデペンデントクラス王者。(as)

トしている徳升（広平）についても、以前同じレースに出たときに、「勢いのあるヤツだな」と印象に残っていました。その後、彼が2018年のS・FJ日本一決定戦でリタイアし、「もうこれでレースは終わりだ」と号泣しているところに出くわして、「あのときのアイツがこういうことになって」「来年、ウチで乗るか？」と声をかけたんです。

佐藤：僕の場合は、ミストの庄司（富士夫、自動車工房MYST代表）さんが推薦するドライバーを乗せています。——印象に残っているドライバーもいますよね？

植田：大湯（都史樹）、牧野（任祐）

DUNLOP

F4選手権はダンロップタイヤのワンメイクレースです。

F4協会HP
http://f4k.co.jp